

町田 貢『日韓インテリジェンス戦争』文芸春秋、2011 302p.
知られざる外交官の日韓情報戦争

花房 征夫

戦後最初のコリアスクール外交官

国家を代表して外交交渉や国際交流、文化事業などを行う外交官には様々な顔がある。しかし的確な現地情報は如何なる外交にも不可欠で、適切な情報を欠いては相手国からの様々な課題に迅速に対応し、戦略的な外交を展開するのは困難である。本書はその情報活動に従事した一外交官の半世紀物語である。

『日韓インテリジェンス戦争』の著者町田貢は隣国韓国の日本大使館で、極めて重要な「情報収集」、「情報分析」を専門にしたコリアスクール（韓国語を研修して対朝鮮半島外交に従事する外交官のこと）で、戦後日韓外交問題の生き字引的人物として知られてきた。町田は一九三五年、新潟県山村の宗教家のもとに生まれて、大学は日本で唯一、朝鮮語を教えていた天理大学外国学部朝鮮語科に学んで、卒業と同時に外務省入省した戦後最初のコリアスクールである。

彼は一九六〇年、ソウルを初めて訪ねて韓国との誼を結び、六十五年からは韓国第二の都市釜山の日本総領事館に四年間赴任した。その後、金大中拉致事件関係で七十三年秋、ソウルの日本大使館政治部に送り込まれ、ソウル日本大使館の情報マンとして韓国の政界、マスコミ、反体制リダー、朴政権の中枢幹部、情報組織（KCIA）高官らと次々と人脈を築いて頭角を現して行く。そして本省帰任後も朝鮮半島関係の情報活動を担当し、国交のない北朝鮮とも実質的な関係改善を模索したことは第三部「北朝鮮」が詳しい。町田は以降、管理職に登って済州事務所長（九〇年）、釜山総領事（九三年）、九六年には日本大使館広報文化院長（公使）に就任し九八年退官している。しかし韓国との絆は持続して、退官後も韓国に留まって世宗大学、成均館大学（いずれも私大）で日本語を教え二〇〇九年、教師生活を終了している。

熾烈な日韓情報戦の攻防

ところで本書の著者が終生関わった韓国情報活動は政治、外交、南北関係、軍事機密など多岐にわたった。日韓関係はロシア、中国などの「旧共産圏諸国」とは異なつて米国との安保軸が存在しているので「準同盟関係」の間柄である。と同時に「金大中拉致事件」のように国家のメンツをかけた熾烈な交渉や摩擦が噴出し、そこに過去の歴史問題がからみつくので数多くのトラブルに直面した。こうして在韓日本大使館には様々な難問が押し寄せ、虚々実々の応酬

や摩擦が繰り返された。

本書収録の主なトラブルだけ挙げても、国交正常化直後の日本大使館では韓国情報機関 KCIA 関係者の侵入問題があった。彼らは極秘の外交文書を閲覧し、金庫保管中の「外貨」まで盗んだ。そのため東京から防諜、保安関係の専門家が急遽、呼ばれて、ソウル日本大使館の情報管理問題を調査するが、防諜システム構築のエピソードは映画世界そのままで、日韓情報戦の苛烈な攻防を教えてくれる。したがって職場盗聴（現代でも同じか？）などは当たり前で、自宅も盗聴されたので外部協力者などの連絡は公衆電話で行った話もある。それから日本大使館情報担当者の行動がマークされて韓国情報機関のファイルに記録されるなどの怖い話がある半面、こうしたチエックに対する警戒を監視役の韓国機関員が喚起するなど、ライバル関係にある日韓情報員の「妙な親近感」が面白い。

情報活動は該当国の思惑を越え、主権を侵しても実行される事もあるから、相手国からしばしば牽制、追放、「事故」などでの警告を受ける。その種の圧力として最も多く使われる手段は「女性問題」のようで、大使館員などは写真などに撮られていることを前提に行動すべきと語られる。また著者は某日本新聞特派員が地方取材に同伴した韓国女性とのトラブルを挙げて、「美女問題」が日韓の外交案件に浮上したことを暗示している。

大使館情報担当者が心すべき第一原則はジャーナリストもそうだが、情報源秘匿である。七〇年代後半だが、朴正熙大統領は駐韓

米軍の撤収を説くカーター大統領に對抗して極秘裏に「核開発」に乗り出した。このことは日本政府でも重大問題になって事実確認が指示された。著者は苦難の末、韓国政府高官まで辿り着いて「裏付け」を取って本省宛極秘文を起草するが、その重要情報源がこともあろうに外務省幹部から某マスコミに流出して、件の韓国情報源がKCIAに連行された。またあるときは韓国情勢の極秘情報が自民政党政治家から漏れて、善意の韓国情報提供者が切り捨てられた酷い話もある。この種の犠牲者は外務省など政府レベルの情報管理が杜撰なことでも引き起こされたものである。町田は「現代日本人は平和ボケ病に罹って秘密保持の自覚がない。政府組織の情報保安も出来ていない」と慨嘆しているが、この点は評者も全的に同感である。

金大中との二十四年間の密談

本書の圧巻は、著者町田館員が元大統領金大中と行動した二十四年間の密談内幕である。町田は七十二年十一月に金大中に初めて出会ってから九十七年十二月の大統領当選直後までの二十四年間、「泣き笑いを共にした」希有な日本人外交官である。町田は七十三年のソウル赴任直後に金大中との自宅に入り込んで以来、六〇回もの密談を、―それも盗聴を恐れて「筆談」で行った。七十五年にはまた西山駐韓大使の指示で金大中の秘密接触を月一、二回頻度で金大中の実弟金大義とスタートさせた。この秘密接触は完全な「スパイ」行為であったため町田は労働者風服装に変えて韓国機関員の尾行をまき、秘密の喫茶店や食堂などで二〇回以上接

触している。この危険極まりない金大中との秘密折衝は、西山大使が駐韓日本人ジャーナリストらの会合で「白状」したことで沙汰やみになったが、こうしたエピソードからも日本政府の情報管理「甘さ」には驚愕せざるを得ない。

金大中は七十一年四月、韓国大統領選挙の野党統一候補者として急浮上して朴正熙大統領を追いつめた。そのため朴大統領は金大中が反朴牙城のリーダーになることを恐れて、翌七十二年「維新憲法」を断行して国会解散し、大統領選出を間接制に切り替えた。「朴政権永久化」の道であった。そのため金大中は民主的に動ける日本やアメリカに政治舞台を移して「反朴正熙政権運動」を意図した。しかし金大中は日本に滞在できるビザがなかったし、何よりも韓国政府発行のパスポート資格を喪失していた。そのため本省に戻っていた町田などコリアスクール事務官は「善意」で金大中ビザ発給に奔走して日本滞在を支援した。しかし金大中は「政治活動は行わない」という約束を反故にして「朴正熙打倒」を継続した。彼は韓国政権にとって最も敏感な朝鮮総連系の「韓民党(韓国民主化回復統一促進国民会議)」幹部らと提携し、七十三年八月十五日には北朝鮮統一政策を意味する「高麗連邦制」を綱領に掲げる「韓民党」議長に就任することが明らかになった。こうして金大中拉致事件が引き起こされた。金大中は七十三年八月八日、東京九段の高級ホテル・グランドパレスから拉致され、事件五日後に摩浦区自宅に連れ戻された金大中が姿を現した。白昼東京で起きた映画場面にも似た韓国情報機関員の主権侵害は日本人の対韓情緒を興奮させ、そこに朴政権を批判していた

社会党や「朝日新聞」など進歩系マスコミが加勢したので、無名の金大中は日本でも「韓国民主化のヒーロー」に祭り上った。

しかし金大中事件は双方が国家威信を抱えた問題だけに簡単な解決法はなかった。したがって金大中事件は「政治的決着」しかなく、この年七十三年十一月には金鍾泌総理が朴大統領特使で来日して謝罪し、日韓双方は金大中の「過去の政治活動」を問わないことで合意し、日本政府の「原状回復要求」は取り下げられた。しかし朴政権は反体制派に担がれる金大中を再度問題にして召還したので日韓関係は再び緊張し、金大中拉致事件の最終的政治決着には満三年を要したのであった。

こうした日韓の政治決着過程で、本書の著者町田は前述したようにソウルの日本大使館勤務を命ぜられて金大中と何十回も接触、密談した。その訪問を著者は町田個人の試みと記しているが信じ難い。金大中拉致事件のような高度の外交案件で、館員個人に判断を任せるなどは不可能である。韓国政府の意向に反しても多数の密談が可能であったのは、時の田中角栄総理、大平正芳外相、宮沢喜一外相などからの直々の指示と思われる。

本書は「情報活動」「金大中元大統領との接触」「北朝鮮問題」「韓国点描」の四部作構成だが、随所に初公開の秘話が続出し第一級の現代日韓関係書になっている。読者は本書を紐解くことで知られざる日韓情報戦の熾烈な内幕と、スパイ小説以上のリアルな国家情報戦の一端を覗けるだろう。

(はなぶさゆきお 東北アジア資料センター代表)